
殺人鬼に憑依したら聖処女と共に戦争に巻き込まれた

真庭烏賊

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

殺人鬼に憑依したら聖処女と共に戦争に巻き込まれた

【Nコード】

N3437Y

【作者名】

真庭烏賊

【あらすじ】

何処を読んでもある意味時効ともいえる死亡フラグをもつ雨生龍之介に憑依してしまった引籠り。そんな彼の前に現れたのは青髭ではなく聖処女であった。更新は不定期。感想お待ちしております。

召喚（前書き）

浮気性分ですが未永くお願いします。

召喚

「あっひゃっひゃっひゃっひゃっひゃ．．．う、うええええええ！」

．．．ど、どうも。子供の死体に囲まれて絶賛嘔吐中の雨生龍之介です。

え？雨生はそのくらいで吐くか？そりゃ．．．本来の雨生なら狂喜乱舞してるだろうが、残念ながら俺は憑依してしまった引籠りだ。

それでも普通はテンプレキターー！！とも言っているかもしれないが、生憎其処までこの惨劇を見て喜んで居られない。

第一に不味いんだよ．．．サーヴァントの召喚に成功しているらしい。なんか風が吹き荒れていてそこら辺のものが中に舞っているんだよ。

ホントに不味い！このままキャスター．．．えつと青髭だっけ？この「Fate/zero」って物語はまだ見終わってないし．．．何よりあんな狂った奴なんか来て見る！俺の精神がマツハだぞ！！
まずいまずいまずい．．．こうなったら！！

「来いサーヴァント！！こうなったら自棄だ！！」

すべてを受け入れるしかねえだろ。

其処に光臨したのは白き聖女。

鎧に守られて尚神々しさに満ち溢れていた。

「サーヴァント、キャスター。呼掛けに応じ此処に召喚されました。

」

声も凜として聞惚れてしまふ。・・・なんて、なんてこった。トンでもない者が来たものだ。こんな汚れきつた俺を浄化しそな瞳に魅入られていく。

「問うましょう。貴方が私のマスターか。」

「は、はい聖女様！！」

知らず内に膝を着き頭を下げていた。

「・・・よろしいでしょう。契約は成立した。卿の願いも確かに聞き届けた。此度の勝利、神の導きと共に。」

この言葉を聴きハツとした。

青髭・・・通称、ジル・ド・レイのことである。フランス百年戦争の英雄にしてフランス元帥になった男。晩年に黒魔術に没頭し何百人ともいわれる若い少年たちを拉致、虐殺した殺人鬼。のちにペロアの童話に登場する殺人鬼青ひげのモデルとなったと言われている。

・・・OK把握。本来コイツが召喚される予定だったんだろ。

そして、イレギュラーともいえる自分の存在に召喚が間違いを起こす・・・うん此処まで大丈夫だろ。

そして俺・・・どっちかというと、あの殺人鬼（原作龍之介）よりもはるかに善人っぽい俺によりキャスターが代わってしまった・・・という事か。

つまり目の前に居る聖女は・・・青髭を触媒としてきて尚且つ少女・・・ってことは！！

「き、ききききさ・・・んっん。貴女はもしや・・・オルレ안의?」

「はい、わたしの真名は、ジャンヌ・ダルク。オルレ안의乙女とも呼ばれたものです。」

ここに、一つ。そして、最後のサーヴァントが現れた。これにより、第4次聖杯戦争の幕が上がったのだった。

【クラス】 キャスター

【マスター】 雨生龍之介

【真名】 ジャンヌ・ダルク

【性別】 女性

【身長・体重】 162cm・40kg

【属性】 秩序・善

【ステータス】 筋力E 耐久C 敏捷E 魔力B+ 幸運D 宝具

A + +

【クラス別スキル】

陣地作成：D

魔術師として、自らに有利な陣地を作り上げる。

“簡易的工房”の形成が可能。

道具作成：D

魔力を帯びた器具を作成できる。

本来セイバーポジションだったが処刑時魔女と呼ばれた為キャストにもなれるがキャスターとしては低ランク。

【固有スキル】

神託：A +

神の託宣により、その状況での適切な判断ができるようになる。

ランクA + の場合、効果は常時発揮される。

カリスマ：B

軍団を指揮する天性の才能。団体戦闘において、自軍の能力を向上させる。

Bランクは、一国の指導者でない者としては破格であると言える。

透化：D

無私的心。精神面への干渉を無効化する精神防御。

神々の加護：A

危機的な局面において優先的に幸運を呼び寄せる能力。

一見名当：B +

サーヴァントを見ただけで真名を当てる能力。B以上で魔眼の領域。

召喚（後書き）

次回。ウェイバー、ランサーを召喚した。の巻き

因みに

【宝具】

とりあえず三つの予定。

- 1、旗
- 2、自分自身
- 3、磔

・・・かな？

此れだというものがあつたら感想のほうで待っています。

威風（前書き）

ウェイバー君のサーヴァントが決まりました。正体は作中で。

あと、宝具は劇中出てきたときに紹介します。

威風

「斬れ！！」

敵君主の言葉を聞き、この世から消える事が分かった。

目に入る世界が途切れる刹那、走馬燈が頭を駆ける。

あのお方の世界・・・人愛の世界を叶える事が出来ず去る自分が恨めしい。

救いがあるならば・・・もう一度、あの桃の園で三義兄弟の盃を交わしたかったが。

「是非も無い・・・さらば！兄じゃ！！」

ここに、一人の将が堕ちたのだった。

く冬木の一角

陣の染料として用意した鶏たちを殺し、その生き血で召喚用の魔方阵を描いていく。そして手順道理用意し、確実に条件を満たしていく。

「閉じよ（満たせ）。閉じよ（満たせ）。閉じよ（満たせ）。閉じよ（満たせ）。閉じよ（満たせ）。閉じよ（満たせ）。繰り返すつどに五度、ただ、満

たされる刻を破却する 「

触媒はなんとかオークションで落した算盤の珠。これはなんでもかの英雄が作った算盤の珠らしい

何のクラスであれ彼は召喚の呪文を唱えて行く。

もしも、かの英雄が現れるなら勝ったも同然。

自分は、知らず不敵な笑みを浮かべていた。

「 告げる。汝の身は我が下に、我が命運は汝の剣に。聖杯の寄る辺に従い、この意、この理に従うならば応えよ 「

内面は儀式を行うために冷静を保ちつつ、燃え盛る情熱が意思と感覚を明敏にする。

「 誓いを此処に。我は常世総ての善と成る者、我は常世総ての悪を敷く者汝三大の言霊を纏う七天、抑止の輪より来たれ、天秤の守り手よ！！」

最後の呪文を詠唱し、魔方陣の中央で魔力が循環と寸断を繰り返し、エーテルの暴風が巻き起こる。陣の文様が赤く紅く朱く染まっ
ていく。

夕陽のように、血のように、燦然と輝いていく。

「さあ来いっ！！」

陣の内側が外界と繋がった。英霊の座と呼ばれる時間と切り離された領域に。人の身で精霊と同格となり、人を超越した最強の霊長たちの集う場へ。

そして・・・

眼を焼き尽くさんとする閃光に思わず後退し、身を圧する風に遂に負けて尻を着く。侮様にも地に這いずり、ただそれらがおさまるのをひたすら待つ。

やがてその光りの中心に、ヒトのカタチをした影が色をなす。

「・・・問おう。貴殿がそれがしの主・・・か？」

現れたる巨漢は自分の背丈を軽く超え、何よりも紅顔で二尺の見事な顎鬚を蓄えていた

ましてや、手に持つ青龍をあしらった巨大な大刀はまさに彼の尊重たる宝具であると一目で分かった。

「サーヴァント・・・ランサー。主を確認。いざ、共にこの戦争に生き残り勝利の美酒に酔わん。」

そう言つとランサー・・・いや、関羽は豪快に笑つたのだつた。

「——はははは。」

不意に笑みを零した。

何という、戦士。

堂々たる風貌で、自分をマスターと認識してくれている。

こなな、

こなな、

召喚如きに腰を抜かした自分に勝利をもたらすと言ってくれている
！！

ならば！！

「ああ！よろしく頼むぞ！！ランサー！！君の武を自分に預けてく
れ！」

そう言つとランサー笑いをやめ、自分に膝をつき

「承知！！」

と交手して誓ってくれたのだつた。

此れより自分、ウェイバー・ベルベットの聖杯戦争が幕を挙げたのだ。

【CLASS】ランサー

【マスター】ウェイバー・ベルベット

【真名】関羽 雲長

【性別】男性

【身長】207cm

【体重】120kg

【属性】混沌・中庸

【ステータス】筋力B+ 耐久B+ 敏捷A- 魔力D- 幸運C

- 宝具A+

【クラス別スキル】

対魔力：C

第二節以下の詠唱による魔術を無効化する。大魔術、儀礼呪法など大掛かりな魔術は防げない。

【保有スキル】

一騎当千：A

一対多人数を想定した戦場における戦術的直感力。師団クラスの敵対勢力、または相手の

対軍宝具・対城宝具に対処する場合に有利な補正が与えられる。

神性：B -

神霊適性を持つかどうか。高いほどより物質的な神霊との混血とさ

れる。

死後千年以上、大陸最高位の神霊の一柱として祭られている。また、元々人間であった身から神になった希有な例。

騎乗：B

騎乗の才能。大抵の乗り物なら人並み以上に乗りこなせるが、魔獣・聖獣ランクの獣は乗りこなせない。

黄金律（偽）：B

身体の黄金比ではなく、算盤を発明し商売の神と崇められていることから得たスキル。商売の成功によって一生金銭で困ることはない。

威風（後書き）

という事で関さんです。実は魏延とどちらかに迷った拳句、ランサーの優勝候補としてなにより、三国志好きな自分の為に彼のものがランサーに成りました。

次回。槍兵、酒を喰らいて獲物を待つ。

殺人鬼、聖処女と共に初陣の場所へ。

の巻き

初戦（前書き）

とりあえず前哨戦みたいなものを。

次回から戦いが！！

初戦

代わり映えのないプレハブの並ぶ倉庫街、まばらな街灯が照らすそこは大型車両の運行も考慮された4車線のアスファルト。そこに聖杯戦争の参加者が一組、場所をとっていた。

「なあ・・・ランサー」

そう言っ隣で一人酒を仰ぐランサーに問いかける。

「ん、ん、ふむ。どうした主よ。」

なんだと酒を一旦中止いて此方を望みこんできた。

「どうしたであゝあ？・・・なに呑気に酒飲んでんだよ！！スカポ
ンタンが！」

と今出せるだけの怒声をランサーの鼓膜にぶつけたのだった。

所変わってキヤスター組

「んむむ。」

俺こと龍之介はゆっくり目を覚まし、天井を見ながら自分の顔を触

る。

「……ないな、今まで其処にあったニキビも、無精髭も。」

やっぱりリアルに成ってんだなーとつくづく思ってしまった。

ふと右を見ると簡素な棺桶に入っている子供達の死体が見える。とりあえずこの子達は警察に知らせておこう。

そう思い、とりあえず体がだるいから二度寝する為左に体を預けると

「……くう。」

……

……

・

「何寝てんだキャスター!!!!」

「きゃん!!--」

とりあえず寝返った顔の傍にキャスター涎を垂らして寝ていたのどついつい蹴り飛ばしてしまった自分は悪くないと思う、丸。

「自己完結しないでくださいよ。うう、玉のお肌が傷ついたらどうするのですか。」

とりあえず聖杯よ、妙な知識をサーヴァントに与えるなと思ひ、そ

のまま熟睡したのだった。

目が覚めると空は茜色に染まっており、もうすぐ日が落ちる頃合いだった。

そこに。

「!!!!マスター!!!」

そう叫んで此方に飛んできたキャスター・・・おい。

「急かすな、つーか服着ろ。服!!!」

こいつ何、風呂入ってんだ?!女の子は風呂が好きなのか?!?

「え?・・・つえ!!!」

そう小さく叫ぶとすぐに魔力で騎士甲冑を着こなす。

そうして顔を紅くしながら進言する。

曰く、サーヴァント同士の戦いが始まったとのこと。

確か、原作だとランサーVSセイバーだったっけ?

ま、とりあえず。

「いくぞ、キャスター。百聞は一見にしかず。場合によっては漁夫の利だぜ！」

「は、畏まりました。」

そういうと霊体化して魔力を辿っていくのだった。

というか、戦いの時だけキツチリしているんだな。ジャンヌ・ダルクって。

再びランサー組。

2騎のサーヴァントが向き合っていた。

一人は銀と紺碧の鎧を着こなす最優のサーヴァント、セイバー。

もう一人は緑の軽鎧を着こなす最速のサーヴァント、ランサー。

互いに獲物を構えて間合いを計っていた。

いかに武神と謳われたランサーでもセイバーの一撃を浴びてしまえばそこで終了である。相手が女でも手加減するほど余裕なぞ彼女の力量の前に無かった。

セイバーもそうであった。聖杯の知識により、相手の武器と容姿で真名が分かったものの其れゆえに後一步が出なかった。

互いに一合一撃の勝負に持ち越そうとしていた。

「どうしたセイバー。まさか臆病風に吹かれたか。」

「貴殿こそ、その青龍偃月刀は飾りか。」

互いに軽く罵倒するも効果なしだった・・・其のとき。

「双方、武器を収めよ。王の御前である。」

雷鳴と共にもう一組のサーヴァントが姿を現したのだった。

初戦（後書き）

短めですが投稿しました。

感想待っています。

勧誘（前書き）

連投・・・疲れた！！

勧誘

全員の瞳が東南の空を見る。

「・・・戦車」

セイバーの傍にいた女性、アイリスフィールの言つとおりそれは古風な戦車だった。

もちろんただの戦車ではない。

本来馬が引くはずの戦車を牽いているのは牡牛、たくましい筋肉を躍動させながらも美しい牡牛だ。

それが壮麗な戦車を牽いて空中を駆けながら近づいてくる。

しかもただ浮いているわけではなく、牡牛の歩みと車輪に紫電を迸らせている。

こんなものを扱えるのは間違いなく英霊だろう。

放出される魔力を考えても宝具以外に考えられない。

戦車の宝具を乗りこなせる者がいるとすれば一人だけ、聖杯の召喚に応じた七騎のサーヴァントの一人、ライダーのクラスによって呼ばれたサーヴァントだろう。

空を翔る戦車は居丈高に頭上を旋回しながら速度を緩め、地上に降りてきた。

戦車に乗っている騎手の姿が確認できる。

巨人かと思間違えるほどの筋骨隆々たる巨軀を持ち、軽い鎧とマントを装備し、髭を生やし見るからに「でかい」大男。放たれる圧倒的な威圧感たまさしく霸王と言っても過言ではない。その口元には不敵な笑いがあった。

男は戦車を操作してセイバーとランサーの間に降り立つ、その位置は二人の戦闘を邪魔する形だ。

ライダーは二人のサーヴァントを見るとトンでもない事を叫んだ。

「わが名は征服王イスカンダル！此度の聖杯戦争ではライダーのクラスで現界している。」

全員が啞然とした。

聖杯戦争によって重要な意味を持つ真名を自分から明かす英霊が居ると思っていなかったのだ。

其処に

「ぐ……何を考えているか！ライダー！！」

ライダーの戦車から出てきた人影が急に声を荒げた。

神経質そうな容貌をした髪をオールバックに纏めてコートを纏った鼻もちならない高慢な態度をした恐らくは魔術師であろう男性。

ただ、其の自慢のオールバックは少し乱れており本人は鼻を押さえていた。恐らく此処に来るまでに鼻をぶつけたのである。

他にも

「いたたたた・・・」

伶俐な美貌を持った赤毛の女性がいた。

二人の名は時計塔きつての天才魔術師ケイネス・エルメロイ・アーチボルトと、名門ヌアザレ家の娘でありケイネスの婚約者であるソラウ・ヌアザレ・ソフィアリであった。

「まったく、余もつまらんマスターに召喚されたものよな。全く窮屈でたまらんわい。余と共に前線で戦うことだけは評価するがそれも女の目を気にしてのことでは、な・・・」

「黙れライダーー!!」

と、原作のライダー組では見られない剣呑な雰囲気の流れてきたのだった。

其の時

「く、っは~~~~~・・・く、苦しい。って、もう終わっちゃったのか!!」

突然の第四者の声に其の場にいた者たちが一斉に声の元に、振り返ったのだった。

其処にいたのは一見、見た目のいい青年であった。何故此処に？迷ったのか？皆が思考の渦に入りかけたとき、

「おお！すっげー！！すっげーぜ、キャスター！こいつら全員英雄なのか！！」

この言葉で皆が構えた。奴は、

「は、そのようですねマスター。」

キャスターのマスターであると。

この空気を破ったのは他でもない。

ライダーであった。

「おお！！忘れておったわい。聞けい、者ども！！・・・うぬらとは聖杯を求めて相争う巡り合わせだが・・・矛を交えるより先に、まずは問うておくことがある。ここはひとつわが軍門に降り、聖杯を譲る気はないか？さすれば余は貴様らを朋友として遇し、世界を制する快悦を共に分かち合う所存である。」

そう宣告したのだった。

サーヴァント、そしてそのマスター達も絶句したのだった。あまりの突拍子のなさにセイバーは怒りを通り越して呆れ果て、ランサーも話についていけず途方にくれて、キャスターはただジツとしていたのだった。

征服王イスカンドル、世界征服に最も近づいた英雄だが、この人を食った提案とむちゃくちゃ以外の評価が思い浮かばない行動はどうだ？

いきなり現れて真名を名乗り、拳句の果てに一合もやりあわぬうちから自分に仕えろと勧誘してくる。

破天荒すぎて英断か愚挙かの判断も出来ない。

「つづ、はっはっはっはっはっは！！すっげーよ！あんた、COOL過ぎて冬、Winterだぜ！！な、な、キヤスター。あいつの真名って何だっけか？！」

ただ一人、龍之介だけは笑っていたのだった。

「はい、先ほど名乗り挙げていたので・・・誠なら征服王イスカンドルとの事。」

「へっ・・・ってあの世界を征服しそうになったて言う！！マジかよ・・・イカシてるぜ！！」

他の参加者たちは龍之介を不審な目で見ていたがそれ以上に龍之介もテンパっていた。

「(マジヤバイ・・・とりあえず原作の龍之介の振りをしときゃ無きゃー!!)」

と、心でなっていた。出てきた所が悪くまさかあの場所に来てしまったとは・・・唯、ライダーはそんな龍之介を見て一言。

「・・・やっぱり、こいつ等よりもア奴のほうが気が合いそうだな・

・・・」と呟いていたのだった。

少し、時間が空き。先の問題にランサーが答えた。

「貴殿の問の答えを返そう、我が忠義を侮辱するでない！」

と一喝したのだった。関羽と言えば生涯、蜀の王にして漢王朝の末裔劉備玄徳一人に忠誠を尽くしてきた男。曹操に囚われても自らは漢に屈して曹操に屈した訳ではないと猛然に言い放ち、孫権に囚われては降服を聞かず斬首された経緯を見ても決して下るなど言うわけが無かった。

「・・・・・・・・そもそもそんな戯言を述べ立てるために、貴様は私とランサーの決闘を邪魔したというのか？」

問いに答えるセイバーの顔には表情はない。ライダーを睨みながら切っ先を向けている・・・・・・・・どうやらライダーの提案がよほど不愉快だったらしい。

「戯言が過ぎたな征服王、騎士として許しがたい侮辱だ。」

本人は戯言などではなく徹頭徹尾本気なのだが・・・・・・・・セイバーとランサーの殺気に挟まれたライダーは、

「むっ・・・・・・・・」

とうなりながらこめかみを指で掻いている。

それでも威風堂々とした態度は微塵も揺るがないのだからこの男も

只者ではない。

最後にキャスターは、

「・・・王とは商人である。故に人など道具としか見れぬ愚物。そんなものに誰が仕えるものか。今は唯、今世のマスターと私を導く神のみが私の仕える者だ。」

と言い放った。

「・・・待遇は応相談だが？」

「・・・くどい！」「」

ライダーの提案・・・と言って良いものかどうかは一瞬で切り伏せられた。

どうやら二人とも真剣勝負の途中で水を差されたことがよほど腹に据えかねたらしい。

場合によってはセイバーとランサーそしてキャスターにライダー一人で立ち向かうことになりそうだ。

「重ねて言うなら、私もまた一人の王としてブリテン国を預かる身だ。いかな大王とは言えど、臣下に下るわけには行かぬ。」

「ほう、ブリテンの王とな？」

セイバーの物言いにその正体を悟ったライダーが破願する。

「これは驚いた。名にしおう騎士王が、こんな小娘だったとは！」

「その小娘の一太刀を浴びてみるか征服王」

小娘扱いされたのが気に入らなかつたらしい。

セイバーの殺気がその濃密さを増す。

刀身から湧き上がる闘気が語っている。

「こりゃー交渉決裂かあ。勿体無いなあ。残念だなあ」

どうやらライダーはこれが交渉だと本気で思っていたらしい。

ライダー以外は決裂して当然と思っているが、本人は本気で残念そうだった。

「それはそうとキャスターよ、さっきの言い方は酷すぎるぞ。このままではセイバーすらも敵に回しかねんぞ？」

とキャスターに問いかける。同時にセイバーもキャスターを覗く。其処には憎悪に引き立てなれたキャスターがいた。

「・・・ふん。王など所詮恩知らずだ。私が仕え王にまで申し上げた勝利王なぞ捕虜となった私を見捨てた。たかが金品との交換を拒否し敵国に売り払ったんだ。誰が信じるものか！私が信じるのは、聖カトリヌ・聖マルグリット・聖ミシエルの三神とマスターのみ。それ以外なぞ、知った事か！！」

と叫ぶとキャスターはローブを脱ぎ捨て剣を構えた。白き鎧に美しき金髪、どこかセイバー・アーサー王に似ているが、その紺碧の瞳が荒々しく濁りそうに成っていた。

「ンな！勝利王でその三神の名・・・ま、まさか、キャスターの真名は……！」

「そうだ！我が名はオルレアンの乙女、ジャンヌ・ダルク！！いくぞ名だけの王よ・・・我が恨みを思い知れ！！」

「は・・・ま、まてよキャスター！・・・ったく。しっかたねーな、おい其処のオールバック！サーヴァント同士遣り合っつのもつまんねーだろ・・・いっちょ、や・ら・な・い・かい。」

ここに、キャスターVSライダーの異色戦争が幕を挙げたのだった。

救国の英雄か

征服王か

勝つのは誰なのかここに居る者たちには知る者等いない。

・・・だが

「フン、王の庭で戯れるのはいいが・・・この我を無視し続けるなど、私の懐具合も限界があるぞ！」

其の言葉ともに何十の何かが飛来してきたのだった。

勧誘（後書き）

というわけで楽しんでいただけましたかな。

ジャンヌの王嫌いは、史実と俺の妄想が混ざっているものなので気にしないでほしい・・・な。説明するのが大変だしね。ではいずね。

聖処女の宝具（前書き）

宝具の説明。

ストーリーは明日以降になります。

聖処女の宝具

ジャンヌ・ダルク

宝具覧

聖少女の戦功^{オルレアン}

ランク：C + 種別：対人宝具 レンジ：？ 最大捕捉：- - 人
オルレアンの解放と勝利王シャルル七世の戴冠の両方が成し遂げられた戦功によつて得た名声が宝具になったもの。

自らの真名を知るものが多いほど外部から取り込む魔力の回復力を早くする事が出来、魔力の枯欠を防ぐ。またこの状態の時、持つている宝剣：聖女の祝福剣^{サン・カトリクス}の効果が発動。任意で筋力・耐久・俊敏の内二つのステータスを2ランク上げる事が出来る。しかし、使用中『百合と天使が舞う先陣旗^{ラ・ビュセル}』を使用する事が出来ない。

百合と天使が舞う先陣旗^{ラ・ビュセル}

ランク：B + 種別：対軍宝具 レンジ：1 ~ 60 最大捕捉：1000人

由来：ジャンヌが持ったとされる天使と百合の描かれた三角旗及びオルレアンの包囲網の突破したことが由来。味方を鼓舞することによつて、味方は幸運・俊敏のステータスが1ランク上昇し、透化：Dと同等の精神耐性を得る。しかし、>矢<と>火<の攻撃に弱くなる。また、使用中『聖少女の戦功^{オルレアン}』がしように出来なくなる。

火刑の磔^{ル・ユンヘ}

ランク：A ++ 種別：対軍宝具 レンジ：1 ~ 50 最大捕捉：700人

「全てを委ねます」と辞世の句を発動の呪文とし、炎を発現させる。その間は<火>の属性を持つ攻撃を無効化し、炎がジャンヌの身を

焼いている間、全ステータスをA++状態にする。
戦闘後、勝利敗北と関係なく、ジャンヌは消滅する。

フレイド・ストーム
百年戦争

ランク：EX 種別：対軍宝具 レンジ：1～99 最大補足：1000人

救国を胸に共に戦場を駆けた戦友達が、サーヴァントとして召喚される。

召喚されるのはいずれもマスター不在のサーヴァントだが、それぞれがEランク相当の『単独行動』『透化』スキルを保有し、最大30ターンに及ぶ現界が可能。しかし、召喚する時、左腕を消滅させるか令呪を一つ消化させないといけない。固有結界でもあるが、この世界はジャンヌの記憶の再生のような物である。そのため魔力の燃費は他の固有結界よりもいいが、龍之介の魔力では持つて5分前後と考えられる。

聖処女の宝具（後書き）

次はランサーの宝具紹介

関聖帝君の宝具（前書き）

関羽の宝具紹介です。

関聖帝君の宝具

関羽 雲長

宝具覧

『青龍偃月刀』

ランク：A - 種別：対人宝具 レンジ：2～5 最大捕捉：1人
普通の武具だが本人のシンボルであったため、宝具として昇華された。

純粹に武具としての性能が高く、オプションとして使い手に『魔力放出』のスキルを与える。

また、あらゆる盾宝具を一撃で破壊する事が出来、サーヴァントの身に纏う鎧すら何も無いが如くすり抜ける事が出来、生身を斬る事が出来る。

これは、多くの兵共を斬つて来たことで手に入れた技術な為魔力の消費を防ぐ事が出来る。

『桃園の誓い』

ランク：A + 種別：召還宝具 レンジ：- 最大捕捉：2人

かの義兄弟の契りの逸話。

一日に一度、常時発動型の召還スキルによって義兄弟を召還する。

召還された関羽、張飛、劉備の3名は8人目以降のサーヴァントとして聖杯戦争に参加し、特例として既存のサーヴァントとクラスを重複することを許される。

劉備・張飛も同じ宝具を所持していることから、事実上の蘇生宝具として機能するため、同じ日に全員を撃破しなければならない。ただし、劉備・張飛・関羽はこの宝具以外使う事は出来ない。（武器を振るえるが効果を發揮する事は出来ない）また、この宝具を使用する際令呪を二つ消費する。

『赤兎馬』

ランク：A 種別：対軍宝具 レンジ：1～5 最大補足：1～1
0人

生前の愛馬であつた英霊馬 赤兎馬の召喚と騎乗。この騎馬に騎乗している間、全ステータスはワンランク向上し、命中判定と物理攻撃に対する防御成功率が2倍になる。『青龍偃月刀』の効果を上げる事もできる。本来ランサーがライダーとして召喚された時に搭載される宝具だが関羽の死後、後を追つて死んだ逸話からどんなクラスでも呼ぶ事ができるようになった。

三国志演義によると赤兎馬は稀代の名馬で燃えるように体が赤く、一日に千里を駆けることができるとされた。

関聖帝君の宝具（後書き）

では明日また合いましょう。

火炙（前書き）

ジャンヌについて書きたい事を書いたつもりです。

異論は認めない。

火炙

突然と何十もの剣戟が振ってきて其処にいたサーヴァント達を蹂躪していったのであった。

「我を差し置いて、『王』を称する不埒な賊が、よもや二人も湧くとは・・・だが、一人はこの馬の骨とも判らぬ雑兵に手傷を負い、もう一人は犬と戯れる。いかに有象無象の雑種とはいえ、仮にも『王』を僭称する程度には名を馳せた猛者であるうに、嘆かわしいにも程があるぞ。」

整い過ぎた相貌。紅蓮に輝く双眸。金色に輝く甲冑とその偉容。口元に浮かぶのは、侮蔑と傲慢さであった。

其の声に真っ先に反応したのは間一髪攻撃を免れたライダーであった。

「難癖をつけられてもなあ？ イスカンダルたる余は、世界に知れ渡る征服王にほかならぬのだが？」

「たわけ。真の王たる英雄は、天上天下に我ただ独り。あとは有象無象の雑種にすぎん」

あまりにも度を越えた放言でありながら、それを超える自尊心と傲慢さがその言に説得力を与えている。

ライダーの度量をもってしても、アーチャーの高慢さは手に余るものであったらしい。二、三、考えるような仕草をしたのち、溜息をついてから口を開く。

「そこまで言うんなら、まずは名乗りを上げたらどうだ？ 貴様も王たるものならば、まさか己の威名を憚りはすまい？」

「問いを投げるか？ 雑種風情が、王たるこの我に向けて？」
話を通じない。しかしそれはなんとなく全員が感じていたことだ。
この男はたとえマスターであろうと他人の言うことを聞かない気がする。

「我が拝謁の栄に浴してなお、この面貌を見知らぬと申すなら・・・
そんな蒙昧は生かしておく価値すらない！！」

アーチャーの左右の空間が歪む。

まるで浮き出てきたかのように姿を現したものに全員が息を呑んだ。
剣と槍が一本ずつ、施されている装飾や感じ取れる魔力の量から明らか
に宝具だ。

アーチャーに選ばれるには投擲に秀でていなければならない。
弓が得意である必要はないが強力な長距離攻撃が可能なのが条件
だ。

アーチャーが攻撃状態に入ったのを見たほかのサーヴァントたちは
皆迎撃の構えを取り、マスターたちは息を呑んだ。

其処に

「待てつて、待てよ王様。俺に良い考えが浮かんだ！」

そう叫ぶ男がいた。龍之介であった。

「なんだ、犬の飼い主が。我の采配を邪魔するか。」

そういうとアーチャーは剣先を龍之介に向けた。

「そうそう！ 実は考えたんだ・・・なんかキャスターの話だとアサ

シンって奴はもう死んじゃったんだろ？そしたら残りは後一人。だつたらここは呼んであげたらどうよ。さっきまでセイバーとランサーは殺し合ってたし、キャスターはライダーを斬りたいらしいし・
・此処は早いもの順でバーサーカーと戦ってから残りをやるってどうだ！！」

とトンデモない事を言い放った。

「・・・おい雑種。この王たる我に狂犬と遊べというのか・・・冗談でも笑えんぞ。」

そついうと更に何十もの武器を空間から引つ張り出したのだった。

「おいおい・・・まあそうだけだよ、王様。ここは重要だぜ！！なにせ王は自分ひとりって言っても実際戦わないと分かんない。けど雑魚と戦ってはつまらない・・・だったらトーナメントにして最後に勝った奴が王様だ！！て叫べじゃいんじゃね？！」

此処に来てサーヴァント達とマスター達は理解した。龍之介という男・・・聖杯戦争をまったく知らないと！たまたま、運良くジャンヌ・ダルクという一級品のサーヴァントを召喚したド素人だ！！

「どうよ、王様！！もしくは最後王様同士の決闘でよくね？王って名乗った人たち・・・ちようど散らばってるしさ！」

龍之介の言った通り、騎士王を名乗ったセイバーはランサーと・征服王と名乗ったライダーはキャスターと。

そして自分こそが真の王であると豪語したアーチャーには・・・と

言おうとした時。

新たな魔力が入ってきた。

全身を覆う鎧は闇よりも暗い黒、長身で肩幅の広く面貌にしても兜に隠れていて見えない。

間違いなく言えるのは、これほどの魔力を発散しているものが人間の範疇に収まるものではありえないということだ。

「……やつべー！！すつげーぜおれ！！まさかホントに来ちゃったよ！！マジで俺……天才じゃね。」

と予想が当たったのがうれしいのか龍之介はキャスターの手を取り、一緒に跳ね踊っていたのだった。

「ちょ、マスター！！や、やめ！！！」

訂正。キャスターは恥ずかしがっていた。

こうして、自動的にアーチャーがバーサーカーと戦う事となり、皆の緊張が緩んだ所に

ドス！

鈍い音が響いた。

「……ハレ??？」

龍之介はふと腹が痛いと思い下を見ると・・・銀色の液体が自分の腹を抉っていたのだった。

「マスター!!」

キャスターはすぐに銀色の液体を斬りかかると液体は生きているが如く、すぐに持主ケイネスの元に戻ったのだった。

「これこそ我が最強の礼装、月霊髓液である。まあ、もぐりのマスターにわざわざ使ってあげるのだ。さっきのマスター同士で戦うというのは嘘っぱちかね？」

そういうと銀色の液体・・・水銀の入っている壺を自分の足元に置き呪文を唱えていく。

そして、

「斬!!」

「がは!!」

呪文が終り、水銀を刃とし龍之介の体を打ち払ったのだった。

宙に舞った龍之介はたまった物ではなかった。

「(や、やっぱり調子こきすぎたな・・・糞つたれ・・・)」

龍之介・・・に入っていた自分はその時の光景に興奮していた。小

説の中にいた史実でも有名な英雄たち。それが目の前に実際に喋っている。気難しい王様にすら語りかける事が出来たのだ。おれってある意味英雄じゃねっと思えた。昔はこうなるんだとよく吠えていたな。ドンと激しい音とともに走馬灯が駆けていたのだった。

「マスター！しっかりして下さい！マスターツ！」

キヤスター・・・ジャンヌが俺を揺すってくれる。なんか背中が痛いなと思うと凹んだコンテナが見えてくる。

よく見ると涙を流していた。

それを見た後、俺の目元は暗くなったのだ・・・

「おいこら！！どういう所存だ！！ケイネ「令呪によって命ずる！ライダー、キヤスターを殺せ！！」Sぐお！！」

紫電の走ったライダーは失望の顔以外浮かぶ事が出来なかった。不意打ちでキヤスターのマスターを攻撃し、あまつさえ貴重な令呪で王たる自分にキヤスターを殺せと命ずる。心中、今回の遠征は難航だなっと思付くのだった。

「・・・すまない、キヤスター。謝っても謝りき「あっはっはっははははははは！！！！」・・・ど、どうした！！」

発狂したように晒うキヤスター・・・しかし、其の背後に磔が見えてきた。

「御主……死ぬ心算か!!」

「……貴様に分るか?! 私の気持ちが! マスターが私を一人の英雄として、人として見てくれたことを!! ああ、そうだな。お前たちから見たらマスターはある意味異端も異端だろうなあ。何が人間皆平等よ? 神の神告が聞こえたら異端? 女で捕虜だから犯しても罪にならない? 数々の戦功も魔女だから白紙?! なによ!! 私は何したって言うの!!! ただ、戦を早く終わらせたかった。国を救いたかっただけなのに。そんな……そんな当たり前な事を思う事すら許されないのか!!!!」神よ!!!!」

キヤスターは何を言っているかも分らないほど錯乱しながらも呪文が解放されようとしていた。ある意味ジャンヌ・ダルクを象徴し、魔女裁判におけるもつともポピュラーな処刑方法、火刑。

名を『火刑の磔』自ら業火に塗れ、全ステータスを極限まで高め最後灰となる悪手の宝具である。

そして、呪文が完成しようとした。

『神よ、あなたに全てをゆ』

「何ほざいて言やがりますか!!」

カツン!

小石がキヤスターの頭に当たり、其処を見守っていた龍之介がコンテナを背中にしながら体を支えていたのだ。

「おいキャスター！お前言ったじゃねえか。この戦いにおいては神告の巫女である自分を封じ、軍人として前に出るってよ！！たく。イキナリ約束破る所か、かってに死のうとしゃがって馬鹿やろう・・とりあえず少し寝る！！キャスター後を何とかしろ！」

そういうと龍之介は目を瞑り・・夢の世界に入ってしまった。

「・・・ふ、なんと難しい課題か。いいだろうマスター！その難関、見事に突破してくれん！！」

そう叫ぶとキャスターは磔を消滅させ、もう一つの宝具を開帳させた。

「いくぞライダー！『聖少女の戦功！』オルレアン！」

急激に魔力の流れが変わった。宙に舞っていた色々な魔力がキャスターに取り込まれていくのだった。此れこそジャンヌの今までの戦功によつて名声となり、現代まで其の名が広まった事により宝具に昇華したものの、聖少女の戦功であった。

「・・・これでマスターからの補給が無くとも戦える、いくぞ貴様ら！我が剣にて恥を知れ！」

「ふん、なにを言い出すかと思えば・・ライダー、キャスターを攻撃しろ。私は其の間に・・な、何だ！！」

キャスターのマスターを殺そうと水銀を操るもウンともスンとも動かなかった。

「な、なにが起きている！！答えるキャスター！」

「フン、簡単な事だろうに・・・これが我が宝具の力だ。この宝具の力は自らの真名を知るものが多いほど外部から取り込む魔力の補充が出来る。そんなチンケな魔力を帯びているものからも吸い取る事が出来るのだ。代わりに魂食らいは出来ぬが・・・ま、する心算も無い。」

「つ、つまり其の宝具がある限り魔術はすぐに不散してしまうのか！？くそ、ライダー！宝具の開帳をゆる「知った事か！！」な、なにいい！！！」

「もう、堪忍袋の尾が切れたわい。ワシのやる事に口を挟むでないわ！！！」

そう、ケイネスに怒鳴りつけると剣を構えキャスターと対峙したのだった。

「・・・ライダー風情がセイバーのマネですか？」

「そういうお主も今は魔術師風情ではないか？」

「ふん、、違くないな・・・行くぞ！征服王！！！」

「来い、救国の戦乙女よ！！！」

こうして、再びライダーVSキャスターの一騎打ちが始まったのだ
った。

其の頃龍之介は夢の中で・・・

「始めまして・・・私が変わりますかな？」

と、本来のキャスターに出会っていたのだった。

火炙（後書き）

次回、俺的ジルさんの思い。また、龍之介強化をお送りします。

緊急アンケート（前書き）

一寸ばかりメールや感想で聖杯戦争は西洋の英霊しか出せない。という人たちが多い為ランサーに関するアンケートをとらせてもらいます。

緊急アンケート

スイマセン、関羽でもいいのではと思うのですが、前書きのような人たちがいるためここは皆様に決めてもらおうと思い開催させていただきます。

1、いや関羽で大丈夫！

2、関羽じゃ駄目・・・と言うか西洋の誰かが良い！

3、素直に四次か五次のランサーでOK??

です。

2を選んでくれた人はランサーになるべき人を書いてください。

とりあえず候補としては、スカサハ・ヴラド公（怪物化前）・オイフェの誰かを考えてます・・・自分としては関公で行きたいですがね。

緊急アンケート（後書き）

タイムリミットは明日の正午12:00までです。

アンケートのご協力、お願いします。

懺悔（前書き）

龍之介へ進化！！

アンケート結果！！関さんで頑張ってくださいますので応援よろしくお願ひします。

懺悔

暗い・・・クライ・・・くらい・・・そんな空間の中・・・

なんか知らんが俺は浮いていた・・・

いやなんでって、足が着かなかつたら浮いてるほか無いだろう？

「どうかしましたか？リュウノスケ？」

・・・うん、現実逃避はすんだな。

「ハジメマシテ・・・キャスターといったほうが良いか？それとも・・・青髭の旦那の方が好みか？？」

俺の目の前に居る人に向かって言った。

奇抜な黒いローブを着たイケメン。肌の色は不健康に白く、両の目が飛び出すかと思うように見開かれてギョロギョロと動いている。

このイケメン・・・いや、ギョロメン事ジル・ド・レイに。

「ええ、そうですね。ハジメマシテですね。リュウノスケ・・・に憑依した人間よ。」

っけ、やっぱばれているか。

「何故かって、あれほど私を慕っていてくれたリュウノスケにしては目の色が透明でしたからね・・・」

そうかい。んじゃ。

「どうすんだ？俺を殺すかい。そんなときや・・・」

と俺はポケットに手を突っ込んだ・・・よし、バタフライナイフはある。

これは特殊でね、キャスターにクラス別スキルの道具作成で作ってもらった特別製でね・・・と言おうとした時

「殺す??何を言っておりますか!!!リュウノスケ!!!私は・・・私はとても感謝しているのです!!!ジャンヌを・・・有り難うございます!!!」

へ?・・・俺何かしたっけ?

「ジャンヌを・・・私はもしかしたら盲信しすぎたかも知れませんが・・・あんなふうに笑っているジャンヌを、私は初めて見ましたから・・・」

そういうと、水晶玉に映像を流す・・・あれは、召喚した時の。

あん時はやばかった・・・マスターと言った瞬間、斬りかかって来たからな・・・涙流しながら。

そして、馬乗りしたら何度も何度も俺の顔を撲って来たな

曰く、

「なぜ・・・何故こんな事したか!!」

「私が魔女だからか！魔女を呼ぶ為にこの子達を生贄にしたのか!!」

「私は好きで魔女になったのではない!!ただ・・・神の導きと共に国を救いたかっただけなのに・・・」

「神は・・・私を拒絶するのか・・・王と一緒に、神も人を・・・私を道具だと思っているのか・・・」

ンで、其の後俺が撲って逆転した所で、SEKKYOしたんだっけな

「てめえ一人で救った気になってんじゃねえ!!ナルシストかよてめえは!!一人で世界救えたら英雄なんてこの世にいねえんだよこのボケ!!」

「第一、王様つてのは国の為なら自分も、信頼する奴も切り捨てなきゃいけない存在だろうが。何でもかんでも頼り切ってんじゃねえ

「!!」

て、感じでお互い殴り合って・・・いつの間にか一緒に簡易的な棺桶作って子供を入れて供養したんだっけな。・・・挿んでる時のキヤスターマジで可愛かったのは内緒だが。

「確かに可愛いですね、リュウノスケ。」

「心読むな!!んで、あんたが此処に来た理由は何だ?」

「・・・わたしは恥ずかしい・・・あれほどジャンヌを救うために復活させる為にあれだけ生贄を捧げた・・・それが彼女を傷つけていた・・・何たる無様!!私は・・・あの頃の私をコロシタイ・・・!!!!」

「・・・そういえば何百人ともいわれる幼い少年たちを拉致虐殺したのは一重にジャンヌを復活させる為、そしてだからこそ黒魔術に染まっていたんだっけな。」

「そこで私は考えた!!このような醜い姿では彼女に会うことは出来ない・・・しかし、彼女の力になりたい!そこで!!」

と旦那が本を渡してきた・・・うわ、人の皮で作られてるな。

「これは我が盟友、プレラーティの遺したこの魔道書『螺湮城教本』でございます。この力は深海の水魔の類を召喚して使役でき、本自体が魔力路としての機能を持っております。御陰で、術者の魔力に關係なく大魔術、儀礼呪法レベルの術行使を可能にする素晴らしいモノ！どうか此れをもつて彼女の力になつてもらいたい！」

「・・・あんたすげーよ。赤の他人・・・ましてやあんたを慕っているリュウノスケを事実殺したような男に、ジャンヌの為だけに盟友の本を渡せるなんて・・・でもよ。」

「わりい・・・受け取れない。だが！・・・あんたの覚悟はもらった！絶対にキャスターを・・・ジャンヌ・ダルクをハッピーにさせてやるよ！だから、一緒に来いよ！きっとキャスターも望んでいるさ！・・・！」

「・・・あなたは優しい・・・しかし、それは出来ない。彼女の中にいる私は、騎士としての、戦士としての・・・彼女の右腕だった頃の私こそが・・・相応しいのだ・・・」

「・・・旦那あ。」

「・・・ふむ、ならばリュウノスケ。令呪の無い腕を見せてください。」

え・・・と思つたが取り合えず右腕を差し出した。すると旦那がつて

「うええええあああああああ！・・・！」

な、な、なななんあああああ。

「だ、旦那が右腕に！！」

吸い込まれた！！

（いえいえ、大丈夫ですよ・・・ただ、リュウノスケの右腕に取り込んだだけの事。）

あ、なんか、模様が・・・百合の文様が出てきたな・・・そういえば戦功で家紋に百合を入れることを許可されたんだっけ？当時、王家の紋章百合だったらしいし。

（これは一度だけ、私を呼ぶ事が出来る仮令呪です。一度だけなので使いどころは見極めてください。）

そ、そうか・・・

（後、呼べるだけなので腕に話しかけても私は反応しませんよ。あと、召喚時間は一日限り・・・では、リュウノスケ。また合える日を。）

そして、目の前に光が見えてきた・・・それじゃ戻りますかね。日常（戦場）に！！

懺悔（後書き）

龍之介の右インジルの旦那！！

はっはー！この展開、読めた奴はいまい！！ほんと本を持たせた
ったのだが・・・きずいたらこうなった。まあ、本人が召喚
したほうがいいのかもれないな。因みに騎士時代のジルさんはキャ
スターの固有結界の中にいますので大丈夫です。アンケート有り難
うございます。

強奪（前書き）

今回、原作から外れます！！思いつきり外れます！！後悔の無い様
に・・・

強奪

取り合えず、情報確認……

俺……なんかキャスターの魔力が逆流しているっぽい。御陰で出血は止まっている……。うん、少し走れるくらいかな。さて、サーヴァント戦はどうなってるかなあ。

セイバーVSランサーは……。ランサーが圧倒していた。

すっげー！一合で吹き飛ばすランサーはすげーけど、コンテナが貫通するほどの力で吹き飛ばされて尚立ち上がるセイバーも凄いな。その近くでバーサーカーっぽいのが横たわっているのが見えた。確か、アーチャーが引いた後、セイバー殺しに行くんだっけ。そこをランサーに邪魔された挙句、気絶中か。

そして、我がサーヴァントのキャスターVSライダーは……。互角だな。

いい剣戟の色を奏でながら打ち合う両者……。その近くで雑音張りにギヤーギヤー言っているのを無視すれば金払ってでも見たいオーケストラになるだろう。

いいなあ……。これが、戦い。あの聖杯戦争か……。

あれ？なんか？？

忘れている・・・？！

そくだ、主人公！！

衛宮切嗣・・・セイバーのマスターであり魔術師殺しの異名を持つ暗殺者。

待てよ、主人公にとって今危険視するのは誰だ・・・その誰かの傍に誰かいるのか・・・

そくだ！！原作でも隙をつけてランサーのマスター殺そうとした男だ！！今のランサーのマスターはウェイバー・・・原作でも無防備なマスターの一人だ。

・・・やっぱり、ランサーの戦いに見入ってる！！やばい！！
仕方ない、取り合えず話そうとして・・・

パン

ウェイバーの胸に鮮血が舞った・・・

>ランサー組<

何だ・・・これ。

「主iiiiiiiiiii!?!?!?!」

ランサーの声が聞こえる・・・くそ、キャスターのマスターの件もあつたのに油断した。取り合えずここは、ランサーと共に引こうとして

斬

そうしてスライディングしながらウェイバー君を確保。

「キャスター！！撤退、否！！後ろに向かって全力全身！！！」

「了解しました。マスター！！！」

そう叫ぶとキャスターは俺を捕まえてコンテナの上へと飛び乗った。

そこで聞こえたのは

「令呪に告げる、主変えに賛同せよ。重ねて令呪にて告げる、自害を禁ずる。」

「ぐ、ぐがああああああああ！！！」

ランサーの断末魔であった。

「くははははははは！！！！ウェイバー君、君のサーヴァント・・・
我らが貰い受けよう、感謝するよ、君の間抜けっぷりには。」

俺は、ケイネスの嘲笑を聞き流しながら逃げるのだった。

強奪（後書き）

はい、まさかのウェイバー君脱落・主人公家を得るの巻きです。

ランサーは不幸属性無いとね・・・と感じてNTRやってみました。
これは前々からやる予定だったので反対は認めない！

あと、デймさんって双剣双槍の使い手、アーサー王は槍の使い手
と聞いて誰か、セイバーなデймさん・ランサーなアルトリアな聖
杯戦争を知りませんか？？

と、言うわけでまた次回会いましょう。

戦後（前書き）

次回、日常編。

戦後

・・・深夜、とぼとぼ歩く三人組。

一人は腹に血の跡があるも、左手の無い少年を慰める殺人鬼

もう一人は周りを気にしながら護衛を兼ねている聖女

そして、左手が無く唯泣きじゃくるしか残っていない魔術師

龍之介とキャスター、先ほど戦争から脱落したランサーの元マスター
ー・ウェイバーであった。

「おいおい、そろそろ泣き止めよ。しょうがねえだろ？お前が悪い
のだからよ。」

「そうですね、『人の振り見て我が身を直せ』という言葉があります。マスターの件があったのに呑気に観戦していたあなたが悪いでしょう。」

・・・と、いうか。

「お、おまえらあゝ・・・ぐじゅ、慰める気ねえーだろ・・・うぐ。」

「ああ、まったく無い」「」

結構追い込んでいた。

暫くするとウェイバーは泣き止むと二人に謝罪、そして。

「んで、なんで僕を助けたんだ。ほっとけば良いじゃないか。」

と追求してきた。

当然である、戦争中なのだ。余計な荷物にしかない自分を助けた理由が見当たらないからだ。

「そこはほら・・・ギブアンドテイク、って奴だ。」

「・・・なら、僕から何を要求するんだ。」

自分を助けた代償が欲しいといってきた・・・まあ、助けてくれた事だし出来る事ならやってやろうと思うウェイバーであった。

なんだかんだで、やはり魔術師としては異端であり人として正常な男であった。

「ああ、それは

家が無いんだ、住まわせてくれ！」

「はぁ！！？」

こうしてキャスター陣は拠点を手にいれたのだった・・・そこを見張っている影の存在に気付かずに。

「以上が、キャスターのマスターに関する情報です。」

其処は、協会から冬木市の管理者・セカンドオーナーを任せられ、魔法使いである宝石翁の系譜を受け継ぐ由緒正しき魔術師遠坂の家系の現当主・遠坂時臣、アーチャーのマスターの工房である。

「そうか、解った。アサシンに見張りを続ける様に指示を」

「は、畏まりました。」

そういつて時臣の弟子、言峰綺礼との交信を切った。

この二人、実は師弟関係で繋がっており、その第一段階として言峰綺礼のサーヴァント、アサシンを時臣のアーチャーが討ち取ったように”見せかける”事にも成功したことで彼らの計画は順調と言える。

いまは、イレギュラーと思える龍之介について調べてもらったが・

「まさかあの聖女を召喚したのが殺人鬼とは……」

予想外も予想外である。

ジャンヌ・ダルク……下手すればアーサー王やイスカンダルよりも知名度の高い英霊である。そのような人物がまさか狂人に召喚されるとは。

「だが、今は監視に留めよう……問題はライダー・ランサー組か

移動手段のライダー、宝具を解放せずに最優のセイバーを圧倒したランサー……二人が組めば幾らアーチャーでも簡単に攻略できない。

「……あの性格だ、自滅を願う……か。」

こうして、遠坂の夜は更けていく。

ホテルの最上階、スイートルームを借りている男の名はケイネス・エルメロイ・アーチボルト。

魔術の名門、アーチボルト家の当主であり、イギリスの魔術師の総本山、時計塔において若くして教鞭をとっている最も将来を囑望されている魔術師だ。

そして、この聖杯戦争においてライダーのマスターでもある。

しかし、彼を知る者達が今のケイネスを見ればどういふ感想を持つだろうか？

鋭角的に整った顔を怒りに歪め、青い瞳を血走らせ、いつもオールバックにしている髪は軽く乱れているため普段の彼からは想像も付かない激昂ぶりだ。

「今なんて言ったか・・・ええ、言ってみよライダー!!」

「言ったとも、かの義人として名高いランサーの介錯をワシがするといっているのだ。」

ライダー・イスカンドルは激怒していた。幾ら外道である魔術師でも矜持くらいはもっているだろうに、それを踏み躪るとは・・・

「まったく持つてなつとらん!!」

「黙れ、ライダー! 貴様のマスターは私だ・・・私の命令を聞けばいいのだ!!」

「何を抜かすか小童が!! ランサーのマスターであった、坊主のほうはまだよかつたわい!!」

「・・・奥方よ。」

「え、いいのよランサー・・・そ、そのなんかあった？」

新しくランサーのマスターになったソラウは戸惑っていた。

あの光景を毎夜毎夜やられればサーヴァントの扱いに神経質になっても可笑しくなかった。

「・・・まあよい、貴殿の将になったのだ。本分は果たそう・・・しかし

その令呪が無くなった時、貴殿の命日と心得よ。」

とランサーは霊体化したのだった。

ピンポイントの殺気を浴びたソラウは其の場で動かなくなり彼を奪ってしまった事に少なからず後悔をしたのだった。

戦後（後書き）

この後の爆破・・・どうなるかは次回、明らかに。

再会（前書き）

これのOP

大帝国のOPが『凜として咲く花の如く』・・・かな？あいそうなの。

再会

ソラウはケイネスに内緒で近場の大型デパートに向かって歩いていった。

理由・・・というかライダーとの喧嘩を一晚中されれば嫌でも居たく無くなるものだ。

序に自分のサーヴァントになったランサーの事も知らなければならぬ・・・どうせランサー自身に聞いても答えてくれそうに無いし・・・

「はあ・・・ホント、男って・・・」

そういうと後ろを振り向く。

五人の人相の悪い男たち・・・ああ、なるほど

「馬鹿ね。」

そういうと周囲に迷惑の掛からないようにするため裏路地に入り追撃の用意をしていた。

「は・・・おいキャスター・・・あれ、どうにかならないかな？」

ウェイバーはマッケンジー家でのんびり過ごそうとしていた・・・

はずなのに

「ひやははははは！！すりすりすり潰して上げるぜ・・・大根ぢやん。」

「おやおや、巧いんだね。大根降ろし。」

「そうなんですよ！一人暮らしでなれたって言うか、やっぱり今の時代男は主夫になれないと彼女が出来ないと思うんですよ！！」

「はっはっはっは。御陰でこんな美人さんを貰えたって訳かい。羨ましいものだね。」

「おや、お前さん。私じゃ不満かい？」

「とんでもない、私に過ぎたるものじゃよ。」

「奥さん！そんな痴話喧嘩してないで・・・そろそろ火加減火加減。」

「おや、そうだね・・・有り難うリュウちゃん！もう少しで焦げてしまう所だったわ。」

「いえいえ！！それより早く飯にしましょうや。」

「・・・なんであんなにフレンドリーなんだ？！」

ウェイバーは頭を抱えていた。

声でわかるように朝からものすごい会話をしている龍之介。ここでは僕の友達として遊びに来た兼腕を折った所を助けてくれた人という設定である。因みに左手は骨折したかのようにギブスをはめてまですで隠している。暗示とはいえどもあんまり見せたくは無いものである。

因みにキャスターは、マリアンヌ・K・ダルクと名乗っており設定として龍之介の許嫁と自称している。

「……やつと私にも春が……うへへへへ、じゅる。」

それで良いのか聖処女！！

それから昼食を終えてこの後何やるかを検討中していたら……龍之介曰く、

「『木を隠すなら森、人を隠すは人込』ってな」

「と、いう訳でデパート行くぞ！！」「おお、これが騎士達の言っていた逢引って奴なのですね。は、励まなければ！！」

(……なにに励むんだよキャスター。)
と心で言ってもこいつもどこか馬耳東風……というか猪突猛進なところがある。

思いだったら吉日という奴だろうか。

そこでふと裏路地に微弱な魔力が漂っていた・・・裏路地だな。

取り合えず龍之介たちは気にせずデパートの方に向かっていった・・・

・いいのかキャスター？

・・・と、取り合えず入ってみよう。

「っち、上玉だけに手間取ったな。」

・・・く！へましたわね・・・というか、ランサー！今こそ主人のピンチでしょう！助けなさいよ！！

「けはは、ここは俺らの縄張り・・・簡単に見つかんねえよ。」

くそ、くそくそ！ケイネスの馬鹿！！こういうお姫様を助けるのが男でしょ！！

「ちて、そんなじゃ・・・げは！」

私の服に手を掛けようとした男が倒れた・・・

なんで・・・

何であなたが・・・

私は彼方からすべてを奪った悪女なのに・・・

「そ、その人を放しやがれ三下あ！！」

其処には右手にパイプ管を持ったウェイバーがいたのだった。

「その頃ケイネスさん家」

「だからライダー。君は黙って僕に従えばいいのだ・・・ナイトE
5。」

「貴様こそ我が戦いぶりを後ろで眺めるといい・・・ポーンF3」

「・・・何時まで続く、彼女も彼女で何処に行った。（ふむ、矢張り無理矢理再契約したが為か念話が通じない。）」

と、ケイネスたちの御守に着かされたランサーであった。その後、彼女の危機を感じたのはそれから二時間後であった。

再会（後書き）

次回・・・一週間位投稿できないかも・・・それでも応援お願いします。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3437y/>

殺人鬼に憑依したら聖処女と共に戦争に巻き込まれた

2011年11月16日13時54分発行